青春！巨人中学校

品川まきき

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人と巨人が共に通う「進撃中学校」

その中で出会い、青春謳歌する少年少女達の恋の物語

目次

1話
〜Eren side〜 ―― 1
〜Ani side〜 ―― 6

1話
～Ｅｒｅｎ　ｓｉｄｅ～

俺はアニと弁当を食べていた。最近、アニと良く飯を一緒に食べるようになった。前までは、ミカサとアルミンと3人で昼食を囲むことが多かったが、”あの日”なぜが以来良く弁当を食べたり、暇な時は時々喋ったりするようになったりした。

入学当初、俺は何故かアニから目の敵にされていた。あの時、俺は本当に嫌われている理由が分からなかった。だから、”あの日”までアニのことを頭がおかしい奴と思っていたんだ。

でも、俺の考えは変わった。”あの日”、調査団の存続をかけてアニと「たたいてかぶってジャンケンポン」で対決した。結局、引き分けだったけど憎んでる理由を聞けたし、調査団も無事存続された。

まあ、自分が目立ち過ぎたせいでアニに迷惑かけたから謝ったけどな。それにしても、そんな小さな理由で怒ったアニが何だか可愛く見えた。

「何故、アニ、あなたはそんなにエレンと一緒に食べたがるの？」

そんなことを考えていると、殺気溢れた声が聞こえる。ミカサだ。毎回、どうしてあ

んなに仲が悪いんだ？ただ、アニは俺と一緒に弁当食べているだけなのに。
「別にいいじゃないか。エレンはあんたのものじゃないだろう？」
すかさず、アニも言い返す。これに関しちゃ、俺はアニの方が正しいと思うんだよな。俺もアニと食べてて楽しいし。
「やめなよ、二人とも。いいじゃない、アニが一緒に弁当を食べるくらい…」
アルミンも止めに入る。流石にアニが可愛そうだ。俺も一言ミカサに言ってやらなきゃな
「おい、ミカサ！俺が良いって言ってんだからいいだろ。頼むから、仲良くしてくれよ…」
ちょっと、強く言いすぎたか？ミカサの顔が瞬時に歪んだ。
「ご、ごめんなさい…」
あぁ、言いすぎた。ミカサの顔はもう泣きそうだった。
「ミカサ、別にそんな怒ってないから俺はただ楽しく食べたいだけだからさ、仲良くしよーぜ」
落ち込んでいたミカサの顔が、ホッとした顔に変わったようだ。良かった。
「まあ、いいよ。エレン、チーハンあげよっか？」
「お、よっしゃ！ありがとな、アニ！」

俺は即座にチーハンに反応した。アニのチーハンは特に美味い。本当に何個でも食べたくなる味だ。

「いいよ、今日は沢山あるし・・」

アニは快く俺にチーハンをくれた。最初は怖くて頭おかしいヤツだと思ったけど、意外と優しくて可愛い所あるじゃーねか、俺は心の中で笑った。

弁当の後、午後の授業を終え、ミカサとアルミンと帰ろうとしてるとアニが俺のクラスまで尋ねてきていた。

遠目なので詳しくは分からないが、何やらミカサとアニが睨み合いながら何か言ってるみたいだ。相変わらず仲悪いな。仲良くすれば良いのにな。

「エレン、ちょっとこっちに来て」

アニにそう呼ばれた。何かあったのか?

「どうした、アニ?」

「エレンは関係ない、下がってて!」

語気を強めてミカサが俺を制止する。またかよ・・・

「待てよ、ミカサ!アニは俺に用があるんだろ?別にいいじゃねーか。で、何だ、話って?」

いくら、仲悪いからって言い過ぎだぞ、ミカサ…

何やらアニは言いにくそうな顔をしている。不思議なヤツだな。

「ふ、二人っきりで話したいんだけど…」

「いいぜ… ア…」

「ダメ、エレン!!」

俺が言うや否や、ミカサは語気を荒くして叫ぶ。何なんだよ、怒らなくてもいいじゃねーか…

「もう、あんたはいいよ！エレン、ちょっとこっち来て!!」

その瞬間、俺の腕はグイッと引っ張られる。俺は、一瞬何が起きたか分からなかった。

「エレン、走るよ！」

アニに手を引っ張られながら、走る俺とアニ。急なアニの行動にただただ、驚くしか無かった。

階段を降りた所で、俺達は止まった。

息を荒くしたまま口を開いたのはアニだった。

「ねえ、エレン… 今度の日曜日空いてるかい？」

「ああ、空いてるが…」

「一緒に買い物に付き合ってくれないかい？」

アニの口から出たものは意外と平凡だった。
「おう！いいぜ！」
今週暇だから、たまには買い物に付き合うのもいいかもなと思い、快く俺は引き受けた。
「ありがとう、エレン・・・」
アニの顔から笑みが零れる。なんだ、アニ、そんなに買い物楽しみなのかよ。
「でも、何で俺なんだ？別のヤツはいなかったのか？」
「あ、あんたが1番暇そうだったんだよ!!あ、あの子には内緒ね！」
確かに俺が1番暇かもしれねーな。誘ったのはその理由かと自分でも納得してしまった。
「あの子って・・・　ミカサか？」
「そ、そうだよ。言うとまためんどくさい事になるし・・・」
まあ、そうだな、あいつら何しててもぎゃーぎゃーしてるし、言わねー方がいいか。
「おう！分かった！　アニとの買い物、楽しみにしてるぜ！」
「う、うん！」
アニ、結構嬉しそうだったな。アニの笑顔に、ちょっと心が温まったような気がした。
あいつ、結構可愛い笑顔するんだな・・・

～Ａｎｉ　ｓｉｄｅ～

ずっと、この時間が続けばいいのに…　私の心は夢心地だった。あいつと昼ご飯を食べれることがどれだけ幸せなことか。

こんな感情が起きるのもきっと、私の「恋」なんだろう。

何を隠そう、私はエレンのことが好きだ。

数ヶ月前であれば、私のこんな姿は考えられないことだった。小学校の頃なんか、男になんか殆ど気にもしなかったし、そもそもの女友達も少なかった。そのせいで、クラスの女子や男子に「氷の女」と影で呼ばれていた。あれはあれで傷つくもんだよ。

それでも、いとも簡単にエレンは氷のような私の心を溶かしてしまった。エレンのことを想えば想うほど、体の中がドクドクと熱くなってきて、心臓の動悸が止まらない。エレンの行動一つ一つに一喜一憂してしまう。

私は完全に心の底からエレンに骨抜きされてしまったのだ。

きっと、そんな気持ちにさせたのは”あの日”の出来事だ。

入学したての頃は、私はエレンのことが嫌いだった。あいつがチーハンが好きと自己紹介をしたせいで、私はみんなの前でチーハンが好きと恥ずかしくて言えなかった。そ

んな、小さなことからエレンを目の敵にして、「調査団の存続」を建前に私は彼に「たたいて被ってジャンケンポン」の勝負を挑んだ。

あの時は、私は単にエレンを自分と違って堂々と物事を言えることが羨ましかっただけなのかもしれない。それが引くに引けなくなって、半ば八つ当たり気味な行動を仕出かしたのかもしれない。

結果、私は全てエレンに負けた。ただ、エレンは私にトドメを刺さなかった。勝負よりも、私を必死に理解してくれようとした。

そんな必死なエレンに、私は目の敵にしていた理由を話すしかなかった。これを聞くことでエレンは怒るかもしれない、そんな思いが頭に過ったりした。

しかし、エレンは違った。あいつは、真っ直ぐで素直な目で私に謝った。私は拍子抜けすると共に、エレンの優しさに気づいたのだ。

今考えれば、この目と優しさが私の心に火をつけたのかもしれない。

「何故、アニ、あなたはそんなにエレンと一緒に食べたがるの？」

昼ご飯を食べながら、少々長い思索に耽っていると、怒気が混じった声が飛んできた。また、あの子か…。声の主は、ミカサ。エレンの幼なじみでエレンに毎回金魚のフンのようにくっついている。

「別にいいじゃないか。エレンはあんたのものじゃないだろう？」
　私はすかさず言い返す。恐らく、この子もエレンのことが好きなんだろう。きっと、彼女は私のエレンに対する好意に気づいて噛みついてきてるんだ。私にとっては、邪魔者でしかないけどね。
「やめなよ、二人とも。いいじゃない、アニが一緒に弁当を食べるくらい…」
　アルミンが、フォローに入る。アルミンもエレンとミカサの幼なじみらしい。
「おい、ミカサ！俺が良いって言ってんだからいいだろ。頼むから、仲良くしてくれよ…」
　エレンもフォローしてくれた。何か、ミカサに勝ったみたいで少し嬉しい。ただ、ミカサはどうだろうね。落ち込んでるんじゃないか…
「ご、ごめんなさい…」
　全く… この子は執着し過ぎなんだよ…。本当、鬱陶しいね。
「ミカサ、別にそんな怒ってないから俺はただ楽しく食べたいだけだからさ、仲良くしよーぜ」
　ミカサの落ち込んだ顔を見て直ぐに、ミカサをフォローする。きっと無自覚なんだろうけど、こういう優しさを見てると罪な男だなとつくづく思う。
「まあ、いいよ。エレン、またチーハンあげよっか？」

「お、よっしゃ！ありがとな、アニ！」
「いいよ、今日は沢山あるし・・」
パッとエレンの顔が輝く。好きな男の笑顔を見るのは格別だ。ずっと見ていたくなるくらい真っ直ぐな笑顔なんだ。まさに、これを見るためにチーハンを毎日沢山持ってきてるんだけどね
それと同時に、ミカサの私への視線も感じた。エレンに嫌われることを避けるためか、何も言わないが無言の圧力をかけてくる
十中八九、私がエレンに何かをあげることを警戒しているんだろう。まあ、ミカサに何か口を出そうもんなら、面倒くさいことになりそうだし、私も気づいていないフリをした。
昼ご飯を食べ終わり、私は授業を受けていた。しかし、恋の病とやらは正直厄介だ。授業中にも関わらず、エレンが頭から離れられない。
一緒にいたい、エレンを独占したい、そんな感情が頭の中をグルグルと駆け巡る。
もう、私は後には引けなかった。この想いを実現させるため、もう賭けに出るしかない、そう考えた私はエレンをどこかの休みにデートに誘うことにした。
どこに行くかさえも自分でもよく分からない。ただ、私はエレンと一緒にいたいんだ。エレンとなら、どこに行ったって楽しめる自信があるから・・・

授業が全て終わった後、私はエレンのいる1年4組に行くことにした。
「アニ、何故4組の前でうろちょろしてるの？」
やっぱり…。私から見てもミカサの警戒心はちょっと異常だよ。でも、そう簡単にエレンに接触すらさせて貰えないことは想定済みだ。
「私は、エレンに用があって来たんだけど…　通してくれない…　？」
「何か用？」
相変わらず、凄い殺気だ。これには、呆れて少し心の中で笑ってしまった。
「私はエレンと二人で話したいんだ…。アンタには関係ないんだけど」
「私から伝えておく。用件は何？」
「話聞いてるかい？アンタには関係ないんだよ」
いい加減にしなよ…。何で、アンタは毎回私の邪魔ばっかり…
「だから、用件を伝えておくと言っている。それとも私に言えないような不都合なことでもあるの？」
もう嫌だ…、幼なじみの癖に…
「エレン、ちょっとこっちに来て」
私は大きな声でエレンを呼んだ。これが、1番手っ取り早い

「どうした、アニ？」
直ぐに気づいたエレンは、私のところに向かってくる。
「エレンは関係ない、下がってて！」
半分キレ気味のミカサはエレンを制止しようとする。
「待てよ、ミカサ！アニは俺に用があるんだろ？別にいいじゃねーか。で、何だ、話って？」
エレン、ちゃんと私の話聞こうとしてくれてありがとう。
「ふ、二人っきりで話したいんだけど…」
言えた…　ここからが本番なんだけどね。
「いいぜ…　ア…」
「ダメ、エレン!!」
エレンが言い終わる前に、ミカサが止める。ミカサももはや分かっているだろう。だから、こんなにも必死で今私を妨害して、止めようとしているんだ。
でもね、私もアンタに負けないくらいエレンのことが好きなんだよ！
その位の妨害があることも覚悟してるし想定済みさ！
「もう、あんたはいいよ！エレン、ちょっとこっち来て!!」
私はエレンの腕を引っ張った。これで、走ってミカサを撒ければ…

「エレン、走るよ！」
エレンの腕を引っ張って私は必死に走る。遠くからミカサの叫び声が聞こえた気がした。ただ、今はミカサが追って来ないことを祈るしかない
階段を降りて、１年４組のクラスからは大分離れた所で止まった。私は、辺りを見回し、ミカサが追って来ていないことを確認する。ミカサが追ってきてないってことは、大方アルミンに諭されて止められたかだろう。
問題はここからだ。
「ねえ、エレン・・・ 今度の日曜日空いてるかい？」
走ったせいで、息が荒い私は、何とか声を絞り出して言った。お願い・・・ 空いてて欲しい！
「ああ、空いてるが・・・」
第一関門クリア。後は、デートに誘うだけ・・・。ここが１番難しいんだよ。ここで断られたら、私は立ち直れないかもしれない。そんな悪夢が脳裏を過ぎる。
ふぅと一つ深呼吸。
「一緒に買い物に付き合ってくれないかい？」
私は覚悟して聞いた。

「おう！いいぜ！」
　その答えは、ＯＫだった。嬉しさより先に、ホッとして力が抜けてしまいそうになった。
「ありがとう、エレン…」
　一つ心の憂いが消えた安心感からか、嬉しさも遅れて込み上げてくる。
「でも、何で俺なんだ？別のヤツはいなかったのか？」
「あ、あんたが１番暇そうだったんだよ!!あ、あの子には内緒ね！」
　暇そうなんて、嘘…。エレンのことが大好きだからに決まってるじゃないかと私は心の中で自分を責める。
　ここで、好きと言ってしまえば、早いのに…。でも、私はそんなことはできやしないだろう。だって、一番大好きなエレン、あんたに嫌われたくないから…
「あの子って…　ミカサか？」
「そ、そうだよ。言うとまためんどくさい事になるし…」
　ミカサにこのことが公に伝えられれば、また妨害されるに違いない。
「おう！分かった！　アニとの買い物、楽しみにしてるぜ！」
　エレンは嫌な顔１つせず、デートを引き受けてくれた。また、エレンの笑顔にドキッとしてしまった。

「う、うん！」

私は少し照れ気味に返事をすると、急いで自分のクラスに戻った。うっかりミカサに絡まれては、めんどくさいからね。

それにしても、嬉しいよ。あいつとデート出来るなんて…

今日は、本当に最高の一日だよ…　神様ありがとう!!